

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 4



令和6年4月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第4号

No.791

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二四年 四月号 (通巻七九一号)

◇今月の二十首詠……北稲八間春秋

岩里周英 2

## 作品

須川千恵香・鈴木結志他

A 齊藤順子他 20 4

B 関根正明他 44

C 志村順子他 54

A 山岸時子他 68

## オリープ集

鈴木剛之・高原 桐他 36

◇今月の二人

尾形悦子 16

## 鑑賞・三好直太の歌 9

〈子〉

久我田鶴子 15

## 〈第一歌集を讀む〉 13

辻 彌生歌集「務しうずまく」

32

— 人生讃歌 —

色井静代

## ■六十年前からの伝言

小関 茂 18

私と短歌との出会い (260)

深山嘉代子 19

◇シルクロード・カフェ — 【責任編集】 木村文子 42

■遊覧寄港〈萩よりの出発〉 鉄地川原朱美 34

■歌壇月旦 — もとむらしげと 35

白熱した選考会

支社・グループ 短信 59

## ■二月号作品批評

A……………滝田靖子・本元由美子 60

浜谷久子・藤川淳子

B……………藤澤元子・藤森巳行

C……………国原喜美子

オリープ集……………田土才恵

今月の二人・作品評

久我田鶴子 17

最近の歌誌より

〔編集部〕 80

校正室より — 間違いやすい言葉・文法 —

81

小野茂樹の一首と高野公彦の一首

82

クリップ…………… 84 神田通信……………表3

## 北稲八間春秋

岩里 周英

木津川を遙か東に見る郷は丘を背負ひて辰巳に広がる

吉相を備へしといふ北稲八間いなやま記録を残す七百年余を

「秀水」の碑建ちて積年お社の井戸家々を潤し来る

汗払ひ葉岳に一杯石清水戦後の夏の醍醐味思ふ

椎繁る鎮守の森に二人して卒寿の春の初詣せり

卒寿なり日々のガタピシ笑ひすてデシベル高まる二人の会話

九十に足踏み入れてみて想ふなり広やかな空還暦の頃

下枝を手折らむとして届かざり己が身丈の縮むを悟らず

昭和八年生まれ。  
地グループ所属。  
歌集に「北稲八間」がある。

ひい孫のぬくもりを受け滲み出す己が笑顔の止めやうも無し  
 乱れ咲く紅白黄のコスモスは荒れ畑隠す彩りにして

癒さると挨拶代はりの一言に腰を伸ばして花の整姿も

今年こそ大向日葵を咲かさむと荒草を取り耕耘機出す

藤袴ゆかりの紫見むものと秋のさ庭に植糸付くるなり

蟻螂の斧折り畳まれて枯れ葉色役目終へしか門扉の陽だまり

カワセミを見たとき聞きつけ散歩道山の池へと取りて返しぬ

「柿食へば」とはなりがたしわが畑の鈴なりの柿は鳥も洪顔

蔦一本ところせきまま軒端まで秋色を帯び古家を覆ふ

数珠玉を集め競ひし溝川は今U字溝水路整ふ

泉川ははそ柞ははその森と詠はれし祝園ほうその神社の秋を尋ぬる

祝園は波布理曾能なり記紀にいふ武埴たけはにの王祭る社と

# 作品 A

須川千恵香

美の回想

・眉

関根榮子

隠れ蓑

・埼

水面風ぎ月ヶ瀬梅溪紅白の梅が枝重ね対を指す  
 殿美溪まろき跳び石合はせ継ぎくくれる水は山懐へ  
 殿美溪石に憩ひし二人旅茶店は高く吊り下げ団子  
 霜降り<sup>霜降り</sup>の摩周湖畔に霧氷群いつまで保つ二色の絶景  
 淡竹のみ百二十年経て笹先に白き花咲き竹枯るとふ  
 令和五年病に難病重なれど心新たに元旦迎ふ  
 風雨の音車が水を弾く音互礼会後の一人の今宵

鈴木結志

好奇心

・福

関根和美

夫

・埼

さざんかの雪中賛歌くれないに夢を見させて花あふれ咲く  
 好奇心、健康寿命など思いおのが特技の書の技を練る  
 静けさや見た目格差もなく一途袖月仰ぎてみじかうた詠む  
 感情をおさえきれずに念込めて三十一文字に心をそそぐ  
 生き姿一念志学とおりきて筆の技練りはや白寿なる  
 至上主義見た目格差など言わず言葉の教えすなおに受くる  
 立ち上がる力信じる第一歩年の初めのうた念入りに詠む

おみくじは小吉なれど結ばずに財布に入れて持ち帰り来し  
 足悪き夫を置いての初詣昔は村の鎮守様といいし  
 手に負えぬ大木となりし隠れ蓑思い出はさておき伐採をせり  
 名に魅かれ苗木を求めし隠れ蓑茂りて門前を隠していたが  
 この家と共に育ちし五十年人の出入りの記憶のあまた  
 雑煮梅洗いいし時能登地震飛び込むニュースよ元旦日無惨  
 近年の地震のサイクル短くてわが家の備えを反省しおり

手相見が喜寿まで生きると夫のこと嘘でも嬉しと泣きたる日あり  
 若き日に余命宣告されし夫生き延びて四十年いま在るよろこび  
 水得たる魚のごときよ職退きていきいき夫の耕す日々は  
 高き処好む夫なり軽々とはしこのほるを時にあやぶむ  
 さるも木から いや夫が木から落ちたりと四メートルの柚子の木の下  
 画像指し「命に関わる大けがです」医師の説明ぼうぜんと聞く  
 ふたたびの命拾いをしたる夫いつどこまでを取りもどすらん

坂上直美

冷や酒

・天

水のごと喉にしみいる冷や酒よ胸にもしみて「生きん」と思う  
辛口はわが好みなり酔うためにあらず目覚むることを望めば  
老いてなおい識を求む新しく美酒を飲みその名おほえん  
良き名なり喉また胸にしみいりし辛口の酒「凜然」という  
われになお欲しきものありおもしろき書の数冊と酒を少々  
いまさらは何を得んとや老い一人良き酒と書とあれば上々  
君なくてはなお生きるため酒は友この盃を未来に捧ぐ

坂出裕子

梅

・洛

新緑の光る枝先春を待つ雷かか梅の古木の  
粉雪と見まがふばかり枝先に白き雷をかか梅は  
もう春が来るよと水がささやきて流れゆくなりきらめきながら  
きさらぎの光まぶしき川の面を屋肩あまた流れゆくなり  
川べりの道の散歩に空を見て雲を眺めてこころやすらふ  
花水木小枝の先にひとつつ丸き雷の空に光りて  
渡り鳥飛び立ちゆきし川の面にきらめき初むる春の光の

佐藤道子

異常

・甲

嬉しげにタンポポの花咲く朝春風が吹く十一月に  
ハイビスカスいまだに元氣パンジーも十一月の朝陽に光る  
花終へし時計草のまた咲きぬ地球の位置の変わりしならむ  
はじめての人と親しむ朝の道甘えてくるワンチャンのゐて  
また会へば紐を引っぱり駈けて来る私の前世は犬かも知れぬ  
庭すみにいまだタンポポ咲きをりぬ令和五年の大晦日に  
救急車すぐ街角にとまりゐて無事祈りつつ傍を過ぐ

篠原まり子

新しき年

・羊

筆跡は交わらぬ兄の年賀状父ははの齡越える兄妹  
正月の惨事痛まし新聞を悲しく畳む丁寧にたたむ  
空海の生まれしさとに手を合わす廻路を巡る元旦のテレビ  
シュートレン未だ残れるを去年今年お八つを好む独居老人  
いなり寿司子の手作りはほんのりと甘く小さいひとりの夕餉  
三箇日南天いく粒鳥が食む青い小鳥は赤くはならず  
新しき年の兆しは小さきものそつと手触るるひ孫の胎動

柴田登志恵

カルベ・ティエム

・天

仔ねずみを捕らへ木蔭に食べゆく自然まぶしき地域猫三毛  
捨て猫は人工島に餌を求むメント・モリ・カルベ・ティエム  
定まりし戸口に餌を待つ地域猫背筋をのぼし気を付けの姿勢  
波立ちて魚鳥あらはれしろがねの鱗の群れはかがやくばかり  
遊歩道の奥の木立の日だまりに地域猫の三毛眠るしまらく  
思ふさまやはら日を浴び三毛猫は伸びの形にベンチ降りゆく  
夕暮れの近づく前に水場から何処へとなく猫は立ち消ゆ

高尾恭子

令和六年元日

・大

あらたまの年の初めの星なんぞみえずスカイツリーが真青くひかる  
鈍色の空が沈んでくる夕べ能登のべた雪ししみ重い  
ひとすじのいのちを灯せ底冷えの体育館に身を寄せて  
雪どけの水に飯炊く奥能登の煙の背に降る雪やまず  
千物屋の姐さんの声ちぎれとぶ朝市通りがぼっかりきえた  
奥能登の避難施設に「ともに」とぞ1・17神戸の灯り  
境内に暖をとりつつ元氣だとポツンと四軒よろみ村から

## 高津砂千子

新サッカー場

・風

紅梅のつぼみふくらむこの朝サッカー場の見字にゆく  
川沿いの桜の木木を濡らしゆく春呼ぶ雨のこちよかりき  
雨に光る空鞆橋を渡りなばピースウィングスタジアムあり  
あたらしき観客席ゆ見おろせる天然芝のみどり呀えざえ  
扉も鍵もなき更衣室ひろびろと選手の名のみ記されてあり  
七階の放送室まで階段を踏みしめのぼる胸はずませて  
ゆつたりと広く翼のような屋根サッカー場に夢のふくらむ

## 滝田靖子

元日

・新

元日ののんびんだらりな夕方を緊急地震速報が鳴る  
想像を絶するのなら想像は役に立たない能登の震度七  
「東日本大震災を思ひ出せ」画面にアナウンサーが叫んでる  
想像を絶する景色を神戸にも熊本にもわれら見たはずだらう  
駅伝の画面にかくも頻回な地震速報一月二日  
「東日本大震災は三月でまだ良かった」ポツリと母が言ふ  
余震続く被災の町に雨が降り被災の町に雪降りつのる

## 玉井綾子

こんなことも

・羊

こんなことも分らないんですかと漏らす彼女の声の飛躍のごとし  
こんなことも分らないのと年下に言われ恥ずべきビジネスキャリア  
こんなことも分らない吾がシステムの問合せ電話を毎日受ける  
こんなことも分らない吾を會計の部署に置く社の人材難は  
定年まで残りの五年が見通せぬ、こんなことも分らない吾には  
「こんなことも分かりません」と言い返す態度に相手の目の瞬かす  
こんなことも分らないのと子に言いしことあり 子には子のキャリアあり

## 田土成彦

厨子

・宙

うつとりと眺めてみたい空を飛ぶゴキブリの羽根の目にかかやくを  
琥珀色の羽根美しきゴキブリを打たねばならぬ理由を探す  
玉虫の厨子いやゴキブリの厨子なども任たはずたよ天平の世に  
餌を探す思案のいらぬ植物のほおつと嬉しい根などはやして  
ヤドカリがイソギンチャクを乗せるとき意思の疎通をどのやうにする  
巣作りの枯れ枝唾へ飛びたてば鳥は一途の羽音残して  
手袋をしない指先ポケットにややふてくされ気味のスタイル

## 田土才恵

能登の地震

・宙

愛おしきひとの幾たり地震に消え跡地に雪は音なく暗し  
冷えしるき部屋に佇み大地震の最中を生きいる人をし思う  
朝市にコーンを売りいし高校生胸の校章の光を反す  
朝市の人の温とさ手作りのスプーンにひとつ思い出遣す  
冬されの能登の海辺の鳴き砂も大地震のあとうたう哀しき  
朝市の焼け跡に吹く風荒れて猛りておらん大地震のあと  
海の音風の音をもないませに能登の輪島の哀しみ深む

## 中島央子

山茶花

・森

シエアハウス廻れる垣のつごもりに山茶花しぐれ明るく過ぎぬ  
山茶花の白きはなびら眼裏に悔いを残して此の年も過ぐ  
リビングに犬が腹這ふ大寒のガラス戸越しに差す冬の光  
霜枯るる川原の柵に十数羽鷗の列に冬の陽ながら  
雨に濡るる箱根の坂をかけのぼる漲る若き力まぶしむ  
言ふことば何も無くなら只見つむ正月の夜の旅客機炎上  
置き去りのベットは哀れわが犬は食事を終へて大欠伸する



永田 進一

能登地震

・山

中村 博子

初春の惨禍

・瀨

地の底より憤怒の相の顕れぬ元日の地震能登半島の沖  
初詣秋篠寺に地震知る大元堂の大揺れを見る

秋篠寺永遠の美ならむ伎芸天地震にも耐えて微笑みてあり

権力の腐臭漂う令和六年裏金疑惑バックベイなど

緊急の地震速報ラジオより能登沖十キロ震度五弱と

なみだ恋重ねておりぬわが恋に八代垂紀逝く大き腫よ

鏡開き歌の仲間とささやかな楽しみとせむ年の初めに

永塚 節子

緑

・銀

西堤 啓子

港

・天

大地震は令和六年元日をことほぐ我ら叩きのめしぬ

燃えひろがる炎を黙し見つめるのみ輪島朝市河井町あたり

河井町に住みいし人おり今日の日に会わず逝きしを良しと諾う

一代を沈金に掛けし吾一さん言葉少なく穏しき笑顔

新聞に山岸町の名の無くばともかくにもはつか安堵す

輪島塗の盆を試きおりたずさわりし幾多の人ら今はいかに

輪島から珠洲へと続く海沿いを走りたりし日あの夏の日よ

仲西 正子

涅槃像

・沖

白子 れい

初詣で

・洛

南蔵院の細き坂道あゆみ来れば涅槃像あり天下は広し

野ざらしの涅槃像なり山峡に訪う人の声にほほえむ

山峡の気を吸い込みつ巨大なる涅槃の像の足裏さする

野ざらしの涅槃の像の温顔に合わす掌に受く晩秋の風

涅槃像に掌を合わさんと幾度も後ずさりして定むる視界

コロナ禍もまた外つ国の戦争も終わり見えてか涅槃の像に

三泊の旅の荷を置き庭みれば伸びのび太る胡瓜三本

お雑煮を食みおりにつつ新玉の年の消けきトキメキ何処や

元日午後能登大地震二日三日羽田の事故に博多の火災

生かされし八十四年の正月に起こりし日本の惨禍に慄く

能登の人避難生活する日々を壊れし家に呆然自失

極寒の能登の潮風受けながら余震の収まる日待つ人ら

余震未だ収まる気配なきままに能登半島の正月半ば

わずかなれど能登震災の義援金郵便局から送金せし午後

私の港であった人は消え 天然の向こうへ行行ってしまった

まがなしき細胞の壊死 私の港を壊し誓を奪い

病より生きて帰れば刃持つ 死んでしまえば最愛の人

芝居なら何の因果とよよと泣く芝居ではないどうするわたし

漂泊の海を見たくて登り来し「家康公遺訓」に励まされるおかし

敢然と受けて立つこそ美しきスパルタクスも真白き富士も

流れる雲が言うこと「なるようにしかならぬ」深海に水仙花揺れ

ほそき細き雨の落ちくる朝のみち初詣でへと踏み締めつつも

ほそき雨落つると思えば止みており背なを照らして朝日の出する

諸羽神社の鳥居をくぐる背に朝日吾の肩の高さに虹が

朝のみち出であう人の少なかり神社を終えて御寺に向かう

眼の前にかかれる低き虹に向き進める一歩一歩をしかと

帰りきて一人ぼっちのお雑煮をいたたく淋しさ今年も交らず

新しき心抱きて今年また生きてゆかんと吾に誓えり

ばばりようこ

まなこにひたと

・鹿

元日の事もあろうか大地震 お屠蘇のむ間もあらなくと 不意に  
弓張りの日本の国の極寒の土地を選びて突然の猛威  
いつどこで何が起るかもわからないと 日常の危惧が現実となった  
おめでとう…五つのことばは罪科を孕みて明けぬ二〇二四年  
ただただに見つめ息のむ放映に 我也受難者まなこにひたと  
ことばには言はず語らずの胸のうち 口に出さうものなら他人事となる  
賜りたる水琴鈴のひとふりにポタリと平 波紋ひろがる

浜谷久子

神纏

・地

十とせぶりふくふく日に当て羽織ってみる母の神纏背に暖かい  
綿入りの甚平神纏反物の揃い仕立ての幾とせを繕る  
一日を終えてくつろぐ冬の夜神纏を着て炬燵に入る母  
擦り切れる袖口布の当てられてまだまだ着られる綿入り神纏  
ジャケットにはないゆるやかな袖ぐりの安らき母がわたしをつつむ  
子らの暮らし見守りながら心ひたに廻りゆくわが父母の娘に  
この冬の家居の楽しみ一つ増え文書くときの母の神纏

檜垣美保子

記憶

・昴

川土手を歩きよこぎるハクセキレイ飛べ飛べ飛べと念じ見送る  
わきにはさむ体温計のたよりなさ溶けはじめたる雪を見ながら  
遠ければふいにふわりとよみがえる記憶に右足失いし猫  
幾たびも母の語りし曾祖母が母亡き今はわれの記憶に  
鳥栖駅のホームに子らと空見上げ雲に名を付けあそびしは春  
なめらかにことば出でこぬははのことばわが手をとりに撫でて笑って  
太陽を見ぬままおわる冬ひと日寒の卵の中に居ること

福田庸子

石蔵

・今

暁の間に沁みゆるるレール音幾人か乗るぬくみ伝へ来  
仔を包む袋を守るなきがらの女郎蜘蛛風に揺られるまま  
風の中に仔を守りあるひと月よなきがらのまま蜘蛛は残れり  
子供らの視点にしつらへありし店廃校の角に建ちをり今も  
山脈に雪は積もらず近き世に水生む郷の名は消えゆくを  
舗装路に代はりし奥は背高き石蔵あまた絹で榮えし  
広き路に帳場奪はれ石蔵は商都桐生の脈はひの跡

藤田美智子

鈍色の空

・新

面会の日を待つことはもはやなく雪とはならぬ雨を見てある  
もう一度聞きたき声は聞きとれずあまたの音を雨は集めて  
亡き人をまだあるやうに思ふ日と遠くなりたる姿恋ふ日と  
雪雲にとつぷり隠れてある山のはだへ静かに呼吸なすべし  
避難するか否かが人を隔てゆくいつの日か見し鈍色の空  
幻の珠洲原発の建屋見つ津波の映像の一時の間に  
何ことも三度どころの話ぢやないデブリ取り出し延期三度め

藤森巳行

どんど焼き

・銀

松の内毎日お酒を飲み続けへモクロピンの数値上がりぬ  
美しき田園山脈石川の被災地想ふ元日の夜  
厳冬を耐へて生き抜け希望持ち石川の友今日春立つ日  
どんど焼き小屋を作りて寄付集め部落回つた遠き日想ふ  
どんど焼きふるりの呼び名は「三九郎」門松と寄付子らは集める  
道祖神の祭りともしふんどんど焼き無病息災祈り松焼く  
今もまだ門松集め燃やす祭りどんど焼きは続いてあるか

## 船田清子

北陸は白

・天

大寒を雨あがりの空春めきて散歩の道のまつたりぬめる  
列島を挟み寒・暖せめぎ合ふ寒暖こもも睦月・如月  
北陸は一面に白ノ避難所は全き眠りの場となりあるや  
一段と寒き一日の真夜中に歌案じつつ居眠りばかり  
寒き夜を暖房ガンガン眠けのみまさりて歌は難産の末  
北陸は一面の白ノ避難所は地元の冷気を凌ぐ術やある  
誰もかも「シワ寄つてゐるなア」と自らは棚上げにして、デイの一日

## 本元由美子

地震

・岡

狭心症の一年ぶりのカテーテル緑の術衣の主治医は笑みくる  
心臓の病を得て後ひととせの朝を優しくシューベルトのロンド  
犬と聴くシューベルトのピアノ曲にコーヒカをる日曜の朝  
ドクターは吾の命を「十年は」といひ呉れたり 朝日を拝む  
義援箱にお札一枚もと入れる 被災地にとどけ温かき飯  
避難所に温きコーヒと幼な子が広がる絵本の小さき日常を  
山里の朝一番の猿花火獣と共存の難きを思ふ

## 牧 雄彦

箕面・冬景色

・大

まなしたにひろがる冬の大阪の街を電車が音なくカーブす  
冬の日に明るく大阪の街が見ゆ紀伊水道もとほく光りて  
箕面の山わづかに残るもみち葉が逆光に透けいまをかよふ  
葉を落としミツバツジの細き枝が青空突きて動くともなし  
もみちせしあか葉もなべて葉を落とす師走なかばの箕面の山は  
あをあをと羊歯の葉群が繁りたるなだりにウラジオ探る人のあり  
昼たけて樹々のあひより日が洩るる山くだりつつ風のこゑ聞く

## 松浦禎子

冬の旅

・羊

えにし深き友の家族に囲まれて健やかに開く令和六年  
高校の机を共にすごしたる歳月とびてそして今在る  
歳末に二度目となりし癌手術受けていつもの正月に入る  
誕生日に米寿迎うる身ひとつを引きずりながらのしみながら  
鉄筆にて写経せしとぞ多羅葉にわがおもいとも小春のひかり  
六畳の二間はわれの全世界この空間に祈りをささぐ  
シューベルトの歌曲集ひと夜しみゆきぬ大島真清の旅どのあたり

## 松永智子

螢

・嵐

まむかひの棚の上なる螢の火夜半自さめ見る呼ばれたること  
玄関の闇の螢火赤く青くそれぞれひとつ夜毎ともるを  
ものの音人の声の絶えし夜半ともる螢火みるとなくみる  
闇の音の音の絶えし夜半さめみてともる螢火を追ふ  
飛び交ひし螢火ふたつまむかひの棚の上なる夜半ともす見る  
音のなきあかときのビルひとりみる白き天井また白き  
さりながらさりながらを言ひ窓をあけ何するとなく螢火をみる

## 松本多摩子

冬の花々

・桜

漸くに開きし冬の花々は時かけ冬の寒さを生きる  
誰もみな死力を尽くし倒れこむ百年の歴史一日見ている  
正月を一瞬に変える地震あり揺れる地球に吾は住みたり  
自転車に乗れない私は歩けないどころも出来る吾のしあわせ  
年末に二日ばかりで掃省の子父の墓参をして掃途につく  
童謡の会は終りて被災地へわずかな寄付に心安らぐ  
去年に娘が誘いくれたる数々の幸せ今年是如何にと期待

## 三浦好博

全き虹

・銚

## 三好聖三

睦月

・伊

寺の鐘祭りの鳴り物信号機うるさいものか寛容寛容  
養生の身を前向きに生きをりて二人に一人の患者引き受く  
今年また初宮参りに直而す「皇紀二千六百八十四年」

襟襟には知らず知らずに尿沁みてグラントゴルフのおぬしは癒ぞ  
「信頼」とふ語に失礼な数十回「信頼回復に努めます」  
「世渡りは今だけ金だけ自分だけガザのことなどどうでもいいシヨ」  
あの蔦も全き虹を樂しむか入りては出でて出でては入りぬ

## 三木まり

流星

・昂

仕事へと向かう車列をすり抜けて青年ひとり銀輪を駆る  
青年が消ぐ銀輪は風を切り車列を超えて寒の空へと  
銀輪の青年の背は空の青、風の青さに紛れず走る  
青年よ振り向かず行け冬のあさ寒の風花きみを寿ぐ  
ジャケットの裾は翼に青年の自転車まっすぐ坂道をゆく  
流星は落ちゆく先の大海の藻屑となつて眠りにつくか  
うろに棲む小鳥が木の実を集めて伴侶を探すかあした飛び立つ

## 宮本靖彦

同窓会

・竣

顔知れど名前出でこぬ同窓会部署年代の話題に探る  
十年余若きも問へば早や喜寿と話せば昔の若武者となる  
長生きの秘訣を問はれ「歩く事」と月並談話に場を白けさせ  
二世代若きが主催の同窓会招待謝すも二次会を辞す  
集合写真撮るにおされて真中へ初代会長の役得なるか  
広州ゆ亡父への土産は櫛の杖半世紀経て我用にたつ  
北国ゆ寒波再来陽はあれど頬打つ風の鍼打たるること

伐り置きし枝をあつめて燃やしおり小雨模様の冬の畑尻  
熱海富士四股は五百を踏むべしと醒めた声音に親方は言う  
花道に眼鏡をかける錦木は勝ちたる後も負けたるあとと  
幕内に若隆景が舂るのは夏かあるいは白秋のころ  
取組表に結果を記す祖父の居て鉄瓶の湯気静かにくゆる  
猫たちが好んで食べるふりかけに大森屋製漁師めしあり  
千本のじゃじゃ馬竹を伐り倒す蛇が居ぬうち蛭が居ぬうち

## 御代田澄江

正月能登の災禍

・茨

救ひ出されその後死にたる母を抱きその息子が言へり「死に目に会へて」  
能登災禍海岸隆起し寄せ来し津波地上駆け上がる五・八メートルとは  
深々と吾が心にも響きくる「舟唄」悲し八代亜紀逝く  
馥郁と香りくれたるドラセナに感謝を送る萎えゆくものへ  
玄冬の海黒々と波荒し暴風警報出でをるらしく  
声出だすこと少なしと百人一首の音読なせば父母思ひ出づ  
父母共に遊びし正月百人一首父の戯れ読み耳に残れり

## 茂木 斌

圧迫骨折

・崎

あこれがまさかの坂か「茂木さん骨折れてますよ」MRI診断結果を医師の告げたり  
骨折を告げられしより入院の四十日の病床のひとつとなる  
ひとりでは何もできない人となりおむつ当てられもどかしきわれ  
四、五日でおむつのはづれ紙パンツに駆づかしきより解かれしわれか  
正月はなしても家で迎へたい雑煮を食みたいひと腕なれど  
元日の宵のニュースに大地震朝市通り壊滅すとは  
厳しい寒さのうちに起こりし能登の地震よまして元日

もとむらしげと

スイーツ

・そ

パソコンを打つ妻の手のきこちなく「僕がやろうか」ぐっと飲みこむ  
漫才を聞きつつ眠る癖がつき積ん読の本とみに増えゆく  
きぞの夜浮かびし事を思い出さぬ一夜で解けし雪の如くに  
糖尿の薬もらい来しその日から三日は許すコンビニスイーツ  
代議士のほぼ六割は要らぬ人眠る集めるヤジリて切れる  
赤信号みんなで渡るかのように「秘書が秘書が」と口を揃える  
煌煌とあかるき風呂に入る妻うすくうすくうに安らげる我

桃原佳子

地震

・沖

ていねいな説明もなく海埋めてつくる飛行場アメリカのため  
ラジオから「雨の暮情」の歌流れ八代亜紀氏の逝去告げいる  
カーラジオの雪の予報を繰り返し聞く我が町も小雪舞い出す  
ひゅうひゅうと吹き抜く風は冷たくて阿蘇の山々真っ白に見ゆる  
会えずして幾年経しか雪の日は音もこぼれず静かなりしよ  
大寒に気温上昇す白菜を食む青虫の姿の見ゆる  
朝な夕な無言の祈り捧げつつ地震の傷跡無く見つむ

山下雅子

七草粥

・習

香りつつ咽を通る七草粥令和六年ししみ味わう  
総領の甚六そのままのわれなりと卒寿を越えて思うことあり  
弱き身をいとしみ育てられしわれよもや永らう九十四年を  
人並に生きて人並に逝きたしとありのままなる姿を好む  
ででっぼうの余韻に浸る夫と聞きしあの朝さながらくもる声に  
人気なき静かな通り新年のあまねきひかり祈りのことし  
いすこより酒はぬるめの畑がいいしみ入る声の計を知るその夜

山野幸司

冬田

・沖

あれやこれやの行事に追われ農作業冬の暗れ間に枯草を焼く  
久しぶり田んぼ踏み踏み仰ぐ空雲は鳥なり羽揚げゆく  
田に伸びる草はわら越え背伸びする春の扉をたく音する  
新しく田んぼが増える百姓の十六年の歴史を刻む  
ゆっくりと冬の田んぼの色模様緑のじゅうたん鳥遊びいる  
わが一人ほのほの鎌を握り立ち田んぼの眠り揺り動かせり  
寒を越え元気な芋をストロープに命まるとわがものにする

山本

孟

能登大地震ほか

・大

元日の談笑の時大地震家屋に血族十人圧死す  
「悲しくて何も言へません」地震輪島 大火の跡に老婆たたずむ  
帰省して親のおせちを味はふに地震に襲はれ生涯を閉づ  
「宝塚」年功序列の金縛り死者が出るまで百年無言  
ツカガール労基法など何ごとぞ美の殿堂に尽くすけなげさ  
週刊誌の見出しを目にし俗世知る冬こもりして爪を切りつつ  
去年今年読みさしの本書きさしのメモ辰年に生きて仕上ぐる

養学登志子

初春の

・凌

初春の吹っ飛ぶ地震来る津波来る輪ゴムの賀状声なき机上  
不気味な揺れテレビ画面に凍り付く逃げて逃げて命をの叫び  
遠くの地震と言うといえども画面の前凍てつきしまま恐怖に沈む  
燕尾服びたり身に添う指揮者立ち禍を打ち払いし去年の正月  
椅子の後燕尾服の尾垂れそらいオーケストラの祝気満つるも  
「待つことよ」忘れなかったと添書きの賀状一葉青年の母の  
にわか雪信じてよきか新葉を吞みくだしたるかすかなる湯気

## 横田 敏子 年輪 福

十二月の誕生祝のシクラメン立春過ぐるもまだ花盛り  
窓越しの日差しに誘われ庭に佇つ 風の冷たく指の悴む  
カーディガン脱ぎて羽織りて忙しなき昨日晴天、今朝氷点下  
地の底に引き込まれゆく気配ありひと夜をかけて雪積もりゆく  
風のなきひと夜を降りし雪止まず夜明けの街は白きひと色  
冬山は樹木も猷も懐に抱きて眠る大きゆりかこ  
冬を耐え樹木はゆっくり育ちゆく去年の年輪ひとつを刻み

## 磯田 ひさ子 桜もち 森

豊年の兆しとなれや寒九の日申し合はせるやうに降り出づ  
凶事に沈む日本に染みゆくか寒九の雨に心やはらく  
夫のやまひ篤くなりしに去年の春ひひなを飾るゆとりなかりき  
抱へるもろもろひとまづ横に置き一年ぶりなるひひなに目見ゆ  
立春を待ちてひひなを飾りたり主なき部屋ひととき和む  
ひな人形飾り終へれば自転車を走らせ長命寺の桜もち買ふ  
ひな人形愛でつつ桜もちを食む半世紀続くわが家の慣ひ

## 市原 やよひ 雀 萬

くり返しどうにもならぬ話する同じ悲しみ持ちたる人と  
忙しき時間に又も電話する寂しいや増す夕暮れ時を  
夫居らねば雀も来ぬかパンくずに今日も一羽の姿もあらず  
あちこちに残されている夫のメモ読めぬ分からぬ本人ならねば  
夫眠る墓はいつもと違う墓青空続く不思議空間  
久々に会う友は認知症なると夫に送られて来る改札口に  
学校から帰ればすぐに会いに来る写真のおじちゃん今日もここに

## 梅本 武義 老いの身 羊

また朝が来たか目覚まし老いの身は自由のはずを心を急かす  
冬枯れの中に緑の瑞々し曼珠沙華と知りて愛しむ  
カーテンを開けると寒さも明るみて遠く山鳩近くに目白  
夕暮れて雨はみぞれに老い二人声無く見入る能登の被災地  
隣人の好意受けるも頼るなと思う老いの身台湾浮かぶ  
香港のようになりたくない台湾民主主義でも本音が言えず  
パレスチナに加担をしたし イスラエルが民主主義の国と思えず

## 大 浪 美 雪 秩父長壽 森

荒川の河口を越えて水源の地ときく秩父長壽にゆく  
乾物屋の店先を占め豆まめまめころころころ大豆花豆  
ひとりの人歌へばつづくひとのゐて「秋の夕日に…」輪唱となる  
あの山を越ゆれば上州秩父峰は哀しみを秘め静もれる山  
ライトアップされたる園の若き松燃ゆるもみちを支へきれずに  
ランタンの灯れる中のもみち狩りからくれなるの昼より淡し  
秩父路に上弦論争したる月こよひ澄みたる満月となる

## 奥田 陽子 さえずり 羊

鳴き交わす声のひびきに見あぐれば高きに照りてあまたなる柿  
被災地のことにも触れて来し便りふるさとの友は今も交わらず  
〈陽子ちゃん〉と呼びくるる友の便りにてふかき祈りの如く結ばる  
芳しき秋の除草の匂い満ち鶴鶴、雀集い来たれる  
隠すなき羽のきらめき翡翠の木の葉にも似て樹にとまりいる  
雨水を飲み身を浸し黄鶺鴒のしほしを憩うベンチの背に  
賜いたる林檎とぞこの日届きしは信濃毎日新聞につつまれ

## 小野 雅子

人生ゲーム

・羊

傾きて淡き日射しはなめらかに冬深みゆく芝生を照らす  
 辰年が明けてつめたき窓のうち三代でする人世ゲーム  
 印刷の字は小さくて眼鏡かけ読みて従ふボードの指示に  
 三千円で家を買ふなりルーレット回して博士にもなりぬ  
 勝つための方策はなしそれだから「人世ゲーム」といふのだらうか  
 災害の項目はなしチャンネルをませば能登の道路が映る  
 ひとりだけ入れる風呂の湯を捨てて珠洲を思へば罪だけれども

## 上 林 節 江

元日の哀

・滝

「大津波、にげろ」の連呼おたやかな初日ふきとび能登にくぎづけ  
 十三年まえと同じを能登に見る崩れ搜われ折れてひしゃげて  
 正月の団欒たしかにありしこと伝えてお節の箱が転がる  
 「水、おむつSOS」の文字能登に足りないものに溢れておらん  
 三陸とおなじ定め能登なるか頻発地震も呻きの声も  
 三十人が登校のニュース学校という日常が子らを励ます  
 何年のかかるうとても復活をめざしてほしい能登の朝市

## 神 田 鈴 子

破壊

・大

元日に突如起きたる能登地震崩るる景色に声を失ふ  
 噴き上がる火の手はみるみる街を焼き暮れゆく空に炎広がる  
 土砂崩れに押し潰されし家々に逃ぐる間もなく人は逝きしか  
 崩壊の家屋に閉ち込められし人の救助さるるを祈るひたすら  
 「生きてゐて」祈りは一つ元日の能登地震より今日は七日目  
 ウクライナ、ガザのニュースは今もなほ破壊、殺戮伝へ来る日々  
 人間が己が世界を破壊する愚を自づから悟る日は何時

## 菊 地 栄 子

冬わらび

・海

結末を想い出せずに観てしまふ「招かれざる客」揺るぎなき愛  
 カマキリは足をたたみて命終う苔ふくらむ菊の葉の陰  
 幾度も運ばれゆきし母なりき唸る救急車見送りて立つ  
 物を映す図書館の床黒々と呼んでもみたりボンの騎士を  
 均さるる山野の姿見えねども秋陽の庭に冬わらび萌ゆ  
 幸せは瞳つぶらな猫の子が戯れている姿見るとき  
 朝より開け閉め多き冷蔵庫もう二十五年こんなに使う

## 草 刈 十 郎

老梅

・世

ミサイルをひたすら打ち上ぐる某国の独裁者得意気に娘連れなる  
 うはさとはかくの如きかその種の話に根と葉生え続くなり  
 あの頃は空腹に耐へあの頃は冬の寒さに震へ耐へたり  
 われと共に生きゐし庭の老梅の今年も蕾ほころび始む  
 庭に来る小鳥のしぐさ眺めをり平和な時代の平和な時間  
 ひらがなに漢字カタカナ日本語の表記思へりけふ文化の日  
 憎しみの連鎖断ち切れなき人間の戦いつまで続けゆくの

## 河 野 繁 子

朱実

・雁

万両の朱実たわわをあさるなく罹患の鳥か姿を見なく  
 はやり病の鶏処分の白づくめ人は卵の値上がり嘆く  
 横殴りの雪を窓よりながめつつ寒波の底どう身をひそめおり  
 夜の闇に羽ひろげ飛ぶムササビの暮らし近きに灯してひとは  
 二〇センチ積もりし雪の日退屈のひとは昔の友憶えおり  
 紅梅の苔に山盛り雪つもり戦禍を逃げる幼子浮かぶ  
 凍て土より顔のぞかせる福寿草明日も生きん花を見るため

## 小林能子

かぶら粥

・羊

降る雨は雪に交はるか能登の氣象テレビに通り一口が過ぐ  
根岸湾の風湧りくる汐見台に七草ならぬかぶら粥炊く  
粥に浮く蕪の葉みどり直くなるを小さき匙に掬ひやすらぐ  
能登地震受ふる日々と老友が小康得ての小正月過ぎ  
生協のポイント集めささやかに人をむすびて被災地支援  
「老いては子に従ふ慣はし」と口こもる友は施設に入居を決めて  
夜半覚めて座してポトルの水を飲む祈りつつそのひと口の水

## 近藤栄昭

あやめ平

・虹

鳩待峠を挟み隣は至仏山頂だけが抜き出て近い  
燧ヶ岳見える山上あやめ平鐘の音響く鏡の池塘に  
頂上になにと菖蒲を間違えた里に伝えてあやめ平に  
適当にあやめ平と名付け親適当な登山者少くはない  
息上がり熊に遭ったと見詰め来るかの領域が尾瀬に広がる  
降りようか頂上の背に満たされて時間は下山この背空を  
守られて心地よい尾瀬は湿りいる燧・至仏・あやめの底に

## 近藤芳仙

ビールをつくる

・信

カーテンをあけて見ゆる前山の日毎に変はる様もおどろし  
ふんはりと影おきながら東へうつりゆく雲 背空をひろぐる  
里山の峯につらなる鉄塔はむかうの街へ我をいざなふ  
山肌の木木が真白に凝る日はゆずを煮立ててビールをつくる  
ある朝は雲にかくれし里山の山裾あそく竹林そよく  
千曲川いざよふ波の音もなく川底ひくく陽を反しをり  
メール便の歌稿がとき今月の送稿全てととのふたべ

## 久我田鶴子

金の針

・羊

眼の濁りここまで進むと見せつつも葉はないと言ふのであつた  
金の針ひかると見えてこはれゆく修復不能をわが告げられつ  
さざんくわの花陰に鳴くタノシイネータノシイネーは姿を見せず  
こはまた内神田にしてさざんくわの花はこぼれてだれも気づかぬ  
文学は手放さないといまも言ふ旅などしないと言ふその口に  
みちのくをわがあくがれて(今もある) (今はもうない) 素朴のほとけ  
翼たたみするとき線になるときを光と呼びむ 水面に刺さる

## ●新刊紹介

「短歌にとって友情とは何か」 江田浩司著

現代短歌社新書 (一八〇〇円+税)

短歌に詠われた友情をめぐるエッセイ集。石川啄木と金田一  
京助を取り上げた「1 友情と限界」からはじまり、「3 孤  
独と友情」では斎藤茂吉と吉井勇、「5 友情は愛に似て」  
では与謝野晶子と山川登美子、三ヶ島霞子と原阿佐緒、「8  
天折と友情」では小中英之と小野茂樹、「10 友情と思想」で  
は馬場あき子と中国革命、というように続いている。